特集 東日本大震災
日本YWCA被災者支援活動報告 No.2

6・7面 日韓ユース・カンファレンス報告

The Young Women's Christian Association
YWCA

日本YWCAの使命（ミッション）
イエス・キリストに学び、共に生きる世界を実現する
世界の人々と共に人権・平和・環境の問題に取り組む

第30総会期主題
平和を実現する人々は幸いであるーマタイによる福音書5章9節

日本YWCAビジョン2015
（1）非核・非暴力による平和を構築する
・平和憲法をまもり、世界に広める
・市民レベルで東北アジアの信頼関係を築く
・女性と子どもの権利をまもる
・パレスチナYWCAの活動を支援する
（2）若い女性のリーダーシップを養成する

12
DECEMBER 2011
No.705

www.ywca.or.jp

特集 Special Issue

東日本大震災

日本YWCA被災者支援活動報告 No.2

震災の中で迎えるクリスマス

新免 貢
宮城学院女子大学 学芸学部教授・宗教センター所長

5月初めに、宮城県石巻市内の葬儀会館で、小さな男の子の写真を抱えた若いお母さんに遭いました。車には小さな棺が乗せられていました。6人家族の中で助かったのは、その若いお母さんだけでした。私は、その場に居合わせて、胸が張り裂ける思いに沈みました。

今後、周囲の人たちは彼女の話にとことん耳を傾ける必要があるでしょう。我が子を失った母親の話は、アンデルセンの作品にも仏典にも聖書にもあります。しかし、私が目撃した女性は、物語ではなく目の前の事実です。被災者の全重量の重みがかかった涙が、頬をつたうのではなく、人知れず地面に直接落ちているに違いありません。

牡鹿半島のある避難所では、元気なく腰を下ろしていた年配の女性と出会いました。孫が津波の犠牲になり、「自分が先に死ねばよかったのに。仮設住宅に移りたくない…」と彼女は寂しそうに語りました。自然災害は死ぬ順番を変

新地っ子の夏休み

東京YWCAは、8月19日～23日、東京YWCA野尻キャンプ場にて、福島県相馬郡新地町の小学生29人を迎えてキャンプを実施しました。地震・津波の被害に加え、放射能の不安の中にある子どもたちは、森と湖に恵まれたキャンプ場で、水遊びやアーチェリーを楽しみ、のびのびとした時間を過ごしました。

えてしまう厳しさがあります。私は再会を期して彼女を抱きしめました。

全国有数のミズダコの水揚げで知られる南三陸町歌津の馬場中山地区を訪ね、同地区の中心人物と会いました。彼は、津波直後の辛かった日々のこと―ひざを抱くようにして身を寄せ合い、老若男女が狭い空間で飢えをしのいだこと。米軍がヘリでやってきて救援物資を海上輸送したこと。その後全国からの救援物資が届けられたこと。行政からの支援もないので自分たちで瓦礫を撤去し、仮設の道をつくったこと、など―を思い出し、感極まって泣き出しました。

避難先のコミュニティセンターの壁に貼り付けられた歌の一節には、「この汗して明日に架けたい橋がある」と書かれていました。10月15日には、我が子のいのちを心配する福島の女性たちが、小中学生の集団疎開を求めて「いのちが大事！」と叫びながら、郡山市役所までデモ行進しました。私もその中にいました。仮設住宅の敷地内の集会所で落語会が開催されました。笑えない状況の中に置かれている飯舘村の住民たちを笑わせる噺家の話術はすごい、まさに「笑援」です。

遺体の服から財布を抜き取る。破壊された家に侵入して窃盗を働く。車をパンクさせてガソリンを抜き取る。「仕事がなくなる」と若い女性が寂しそうに携帯電話で話す。「前の仕事がしたい」と失業者が叫ぶ。店を休業に追いこまれる。そういう状況が震災です。「費用など気にすることなく、請求書は国に回してやればいい。耐える姿が称賛される時期は過ぎた。被災者自らが動き、声を上げねばならない」と主張する地元新聞の社説は、被災地域の危機感を率直に表明しています。

●

こういう被災状況の中で、クリスマスが闇路を照らす本当のクリスマスとなるために、一肌も二肌も脱ぐ愛の業に励みたいものです。

ルカによる福音書2章1～7節は、二人の対照的な「神」について語っています。一人の「神」は大工の息子イエスです。もう一人の「神」はローマ皇帝アウグストゥス（紀元前27―紀元14在位）です。人を救う力は、輝かしい権力を手中に収めた皇帝にではなく、上下関係を超えて、多くの名もなき人々と豊かに交流して生きたイエスのほうにこそあります。そのことは、イエス誕生時の状況を見ればわかります。マリアが月満ちてイエスを出産しました。宿屋に部屋がないので、幼子イエスは飼い葉桶に寝かされました。最低の境遇でイエスは産み落とされました。そういう仕方で人知れず生まれたイエスであればこそ、我が子を心ならずも捨てる恵まれないお母さん、子どもをトイレで産み落とす孤独な女子高校生、我が子を虐待してしまう親たちの、それぞれの追い詰められた状況に深い思いを寄せるに違いありません。キリスト教の福音は、そこに届かなければ、大嘘、大風呂敷となります。

人を捨てないイエスの生き方を通して人の居場所をつくり出すのが、福音的生き方です。イエスの誕生を祝いつつ、互いにいのちに繋がり合っていることの喜びと感謝、かけがえのなさを分かち合いたいと思います。

特集 Special Issue 東日本大震災

忍び寄る影

馬上貴美子

来春から全国の中学校で使用される教科書の採択が、今夏行われ、各地で、いわゆる「新しい歴史教科書をつくる会」（以下、「つくる会」）系の教科書が導入されました。

10年前に出版された扶桑社の『新しい歴史教科書』は、「つくる会」の内部抗争のため、育鵬社版・自由社版という二つの類似した内容の教科書を生み出す結果となりました。この二つの教科書には、多くの検定意見が付けられましたが、結局、両社とも検定に合格しました。「つくる会」は、他社の教科書を「自虐史観」に基づくものと批判し、日本国民の一体化と優秀性を強調し、自国中心的な世界像を教科書に盛り込もうとしています。この10年、「つくる会」の教科書に対する批判は続いてきましたが、その一方、採択する公立・私立中学校が、増えているのも確かなことです。今年、育鵬社は、5％に近い採択率、自由社の歴史教科書は、0・05％、公民教科書は0・02％の採択率ですから、全体的に見れば、まだまだ少数です。しかし、採択率が徐々にではあっても増えていることに危惧を覚えます。

憲法26条で規定されている「教育を受ける権利」を保障する教育内容は、誰がどのように定めるべきであるかは、永年にわたって論議され、また、司法の判断も出されていますが、2006年12月に施行された新しい教育基本法は、公教育の内容は、国会で制定された法律に基づいて、国家の教育行政が、その内容を定めることができるとする国家の教育権の立場を明確に打ち出しました。そして、そのことと、「つくる会」系の教科書の着実な浸透ぶりとは、どこかで繋がっている気がします。私たちは、気づかないうちにすでに敷かれたレールの上を走っていて、その行き先にも無関心であるという事態に陥っているのではないでしょうか。

（名古屋YWCA会員）

東日本大震災
日本YWCAの被災者支援の取り組み

女性と子どもの安全と安心のために

テレビ電話による子どもたちのこころのケア

避難者受け入れのための住居支援

こころのケア

福島県新地町「災害ボランティアセンター」活動支援

被災地の子どもたちのリフレッシュプログラム

物資支援

東北ヘルプ事務局ボランティア派遣

3･11以降毎月「11日」がマイルストーン（里程標）です。この日が区切りとなり、次の「11日」までに何をするかを考えるようになりました。日本YWCA被災者支援プロジェクトは、東日本大震災の地震・津波被害と東京電力福島第一原発事故による放射能被害の双方への支援活動を続けています。

●

福島では放射能被害が人々を苦しめ続けています。避難することにも、留まることにも、人生のかかった大きな決断が必要であり、容易なことではありません。県外の人が想像する以上に、精神的なストレスがあります。どちらか一方を支援するのではなく、「避難」を決断する人々には「避難」を実現できる支援を、「留まらざるを得ない」人々には、留まることを受け入れ、その中で最大限できることをしたいと考えています。

この夏には、セカンドハウスプログラムとして、地域YWCAの紹介する住居・家庭での福島の人々の受け入れプログラムを実施し、9つの地域YWCAが14家族42人を迎え入れました。その数は決して多くはありませんが、互いの信頼関係と絆を深めることができました。

また、夏休みに被災地の母子や子どもたちを札幌から福岡までの9つの地域YWCAが受け入れ、キャンプや観光などのリフレッシュ・プログラムを展開しました。

このようなセカンドハウスや母子の受け入れプログラムと「こころのケア」講座は、福島の人々の避難と心身のストレスケアの両方に効果があると考えており、今後も継続すべき大切な活動です。現実を見て痛感するのは、実際の支援と共に、「チェルノブイリ」から学び、その経験を生かすべきだと言うことです。自然災害とは異なる、この放射能の甚大な被害にどのように立ち向かうべきかを考え、共に歩むべき道の方向を決めなければなりません。

●

地震・津波被害に関しては、宮城県との県境の沿岸部に位置する福島県相馬郡新地町において、当地の社会福祉協議会が運営する災害ボランティアセンター（現「しんち町生活支援ボランティアセンター」）に、5月7日～8月29日までボランティアコーディネーターを派遣し、地域YWCAの会員・職員・会友の31人（延べ人数40人）がその運営に関わりました。

現在は、しんち町生活支援ボランティアセンターに加え、新地町内の小中学校への中期支援が始まっています。学校の休みを利用した各地域YWCAの受け入れプログラムはこの冬休みも実施されます。また、10月から中学校での補習クラス・小学校での「こころのケア」単発講座も実施され、被災地支援プログラムから、母子へのトータルなケアプログラムへと発展しています。

仙台YWCAを拠点にした復興支援は、震災復興支援室「こころの杜」として歩み始めました。世間では、震災も放射能被害も「今も続く」という認識から「忘れられようとしている過去」に早くも移り始めているように思います。被災地にあるYWCAとして、現地の声を伝え、他団体とのネットワークを構築し、被災された方々を支援し、全国へ世界へ協力を求め続けることが大きな使命となるでしょう。

仙台YWCAのみならず、各地域YWCAに、継続支援のため次々と復興支援関連の委員会やプロジェクトが発足しています。被災地の人々の「隣り人」となり、共に歩んでいきましょう。

日本YWCA被災者支援プロジェクト
担当幹事　前田圭子

震災復興支援室「こころの杜」開設
こころのケア活動

日本YWCA被災者支援プロジェクトの一つとして、仙台YWCAが中心となり、「震災を経て、わたしたちにできること」をテーマに金香百合さんを講師に「心と体のケア　ボランティア養成講座」を実施してきました。6月・7月に開催した3回の講座には、毎回50名以上の方々が熱心に、被災地にあって何かしなければとの思いを持って、仙台近辺や遠くからも参加されました。その後、9月からは、毎月1回の傾聴サロンとボランティア研修を実施しています。

10月には、仙台YWCA震災復興支援室「こころの杜」を開設しました。支援者のためのこころのケア研修・仮設住宅や一般住宅の被災者訪問・傾聴サロン・バスツアーなどのプログラム、リクレーションを通したこころのケアを展開していく予定です。今後この活動は長期にわたると考えられるので、継続可能な活動を企画・実施していきたいと考えています。

仙台YWCA会長　松本光子

福島のお母さんたちへの講座&学習会
こころのケア活動

福島市は事故のあった原子力発電所から約60㎞離れていますが、いわゆる「ホットスポット」が市内に点在するため、子どもを持つ多くの家庭が県外へと避難しました。しかし、どうしても福島を離れることの出来ない人々には「このまま暮らし続けても大丈夫なのか」との不安が続きます。

「市民一人ひとりが放射線に対する正しい知識を持たなければ」と、7月、私たちはかねてより信頼を寄せていた高木学校の崎山比早子さんに「原発事故と健康被害」の講演をお願いしました。定員を超える約130人の聴衆で、講演終了後も質問や相談をする列が出来、「福島での出産はどうでしょうか」と質問された妊娠中の女性もおられました。「放射線がDNAに与える影響が理解できた」「内部被爆を考えると食物も注意せねば」等の感想も多数寄せられました。

また、金香百合さんによる「心のケアYサロン―支えあう傾聴―」のプログラムを11月までに4回持ちました。癒しを学ぶ場が癒される場ともなり、「次回が楽しみ」と参加者も増えています。

福島YWCA会長　渡辺園子

ご家族の想いにふれて
セカンドハウスプロジェクト

新潟YWCAはこの夏、郡山から5人家族1組（母親、小学6年と2年の女子、2歳と生後10カ月の男子）をお迎えしました。約1カ月、元気に過ごし、「新潟では何の心配もなく生活できました。地元では我慢させていた外遊びも思う存分させてあげられました」と喜んでくださいました。

新潟YWCAのメンバーとの交流会は、ご家族の抱える不安や葛藤に直接触れる機会になりました。子どもの健康と将来を考え、良かれと思っての避難も、子どもにとってはお友達と離れての生活。早く帰りたいとせがまれ、お母さんは悩んでおられました。避難区域ではないため「なぜ避難するの？」と言われることもあるとお聞きし、海辺ですいか割りなどして楽しく過ごしながらも心が痛みました。

新潟ではお盆の頃に里帰りする親族を迎えて忙しいメンバーもおり、私たちには難しいと思えたこの取り組みでしたが、ご家族を迎える準備や交流会に参加する中で、日本YWCA被災者支援の働きの大きさとYWCAに連なる意義を感じることができました。放射能の不安を抱えるご一家の生活が守られることを願い、祈りつつ支援を続けていきたいと思います。

新潟YWCA会長　汐崎貞子

測っています

現在、福島YWCAは、日本YWCAから放射線の積算値を測定する「ポケット線量計」2台、空間放射線を測定する「シンチレーションサーベイメータ」＝写真＝1台を借り活用しています。ポケット線量計は会員が1週間ごとに測定しています。

サーベイメータでは、場所や高さの共通項目を設定して会員宅の測定記録を作っています。6月上旬の測定から4カ月半後の測定では、空中の放射線が低下したことで室内の線量が下がっていることが分かりました。この4カ月でさまざまな除染を行った会員宅では、6月より驚くほど線量が下がったことが数字でわかりました。

目に見えず、匂いもない放射能を把握できるのはこれらの機器があらわす数値だけです。測定結果は除染の目安や不安を取り除く手段に、と前向きに活用していきたいと思っています。

福島YWCA　荒木紀子

新地町でのボランティアに参加して

7月23日より29日まで、新地町災害ボランティアセンターで働き、主に受付業務を行いました。地元のボランティアの方ともお話でき、皆さん、明るく会話していましたが、放射能に関して家族間でも感じ方が違う、誰も視察に来ないので見捨てられている気がする、作った野菜を食べていいのかわからないが今までしてきたことをせずにはいられない、学校は統合されて窮屈な中で授業が行われているのに教育のことが考えられていないなど、それぞれがいろいろな思いを抱えていらっしゃるのがわかりました。

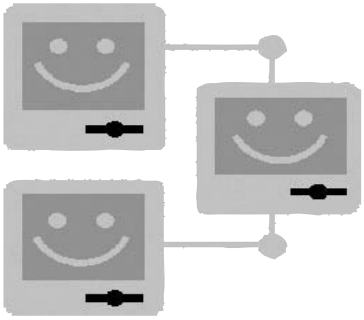
現場の作業も手伝いました。家の中には砂や木の枝、ガラスの破片、台所用品やおもちゃなどの品々が30㎝くらい積もっており、とても家族では片づける気力が出ないだろうと思われ、ボランティアの力は大きいと実感しました。裏山の瓦礫の撤去をした家の方が、「復興したら、ぜひまた見に来てください」と言ってくださったのが、とても心に沁みました。

災害に苦しみながらも一生懸命生活している人がいることをいつも思いながら、できることをしていきたいと思います。

東京YWCA会員　久宗百合子

シンチ・ハート・プロジェクト
テレビ電話による子どもたちのこころのケア

「子どもたちは、被災体験を話したくて仕方がない様子だが、周りの大人たちが対応している余裕がない。テレビ電話で、子どもたちの話を聞いてほしい」という福島県新地町教育委員会の要請で、名古屋YWCAで、テレビ電話による子どもたちへのこころのケア「シンチ・ハート・プロジェクト」を行うことになりました。



新地町にある3つの小学校の保健室と名古屋YWCAがつながり、子どもたちの話を聴きます。どの小学校でも、子どもたちは、初めて見るテレビ電話に興味津々の様子。とはいっても、テレビの向うの、初めて出会う相談員の私たちと、すぐに打ち解けて話せるわけもありません。最初はお互い知り合うため、名古屋や新地町の名物を教え合ったり、好きな教科や得意なスポーツなどを話し合ったりして、気さくに話し合えるように工夫しました。

2学期に入ってテレビ電話の利用も徐々に増え、日常生活の話の中から、被災体験を話してくれたり、現在悩んでいることを話してくれたりします。トラウマは語ることによって回復していくと言われています。無理に話を聴き出すのではなく、話したいことを話したいだけ、話したくないことは話さなくても良い、自分自身のペースで話していただけるよう、心がけています。

名古屋YWCA会員　増井さとみ

福島の子どもたちが京都へ
夏のリフレッシュプログラム

この夏、7月29日から8月12日までの2週間、14人の福島の子どもたちが京都にやってきました。ホームスティをしながら、いくつものキャンプに、陶芸やドラムなどの体験プログラムに、またプールに行ったり博物館に行ったりと、日に日にパワーを全開させていきました。

ある日、外出中に夕立に遭いました。最初は何とか雨を避けようと必死だった子どもたちですが、はたと「放射能ないよね？じゃ、ぬれても大丈夫」と言って元気に駆け出していきました。私はハッとし、彼らのピリピリとした日常を思いました。

ここ京都にいてもできることを一つでも二つでも実現したいという思いを多くの会員や職員と共有し、このように一つの形になし得たことは私たちの大きな喜びです。また実現に際し、京都YMCAをはじめ、多くの関係者・団体、大学生・高校生ボランティアの方々に多大なご協力をいただきましたこと、心より深く感謝申し上げます。

多少の体調不良やホームシックも乗り越え、みんなの「京都でやりたいこと（抹茶アイスを食べる、思いっきり遊ぶ、10円玉の平等院を見に行く、釣りをするなど）」もそれぞれ達成して元気で帰って行きました。私たちにも思い出をいっぱい残して。

京都YWCA会長　神門佐千子

第13回 日韓ユース・カンファレンス報告

テーマ

平和な世界のための日韓YWCAユースたちのマーチ

北朝鮮脱北者のユースと在日コリアンのユースと共に生きていく

日韓ユース・カンファレンスは、日本・韓国YWCAが共催し、日韓に共通する問題に取り組むユース交流プログラムです。今年は、北朝鮮脱北者や在日コリアンの人々との共生をテーマに、平和を考えるワークショップやプレゼンテーション、非武装地帯（DMZ）へのフィールドワークなどを通じて、平和のためにそれぞれができることを話し合いました。

8月30日から9月2日にソウルで開催された、2011年度の日韓ユース・カンファレンスには、日韓から約60名のユースたちが参加した。同世代の仲間たちと寝食を共に過ごした時間は濃密で、プログラムや何気ない会話を通し、さまざまなことを考えさせられた。去年から2度目の参加であるからこそ感じられたこと、また考えたことを書いていきたいと思う。

まず一つ目は、日韓ユース・カンファレンスが継続的なプログラムであるということである。去年広島で出会った韓国の仲間たちと再び会えたことは、私にとって非常に大きな喜びであった。このようにして、先輩たちが粘り強く地道に顔の見える関係を築いてきたからこそ、今の信頼関係があるのだということを強く実感した。そして同時に、新しい多くの出会いにも恵まれた。1回のカンファレンスで出会える人数は限られているが、着実に輪が広がっていることを感じる。

二つ目は、日本の参加者のチームワークである。去年の反省から、今年度は事前に勉強会を2回行った。それによってチームとしての結束が強まり、参加者が感じたことをそのまま伝え合うことのできる雰囲気がつくられた。チームワークができたことで、話し合いやプレゼンテーション、出し物を成功させられたと感じる。

反省会では、事前学習の段階で歴史についてもっと勉強する必要があったことや、プログラム中の言語への配慮が足りなかったことなどの反省も多く出された。そして、参加者全員が各地域で報告も行った。

来年度の開催地は日本である。今年度の反省点を生かして、実り多い日韓ユース・カンファレンスを行いたい。

第13回日韓ユース・カンファレンス
実行委員長　堀添里緒

周りの人々を振り返ることができた大切な時間

私はインターンシップに応募して、このプログラムに学生スタッフとして参加した。韓国の参加者たちは、カンファレンスが始まる前、7月から講師を招き、講義を聴いて、脱北者・在日コリアンなどについて勉強する事前ミーティングを持った。

カンファレンスは、朝7時半から夜10時まで4日間とてもぎっちりした日程で、それでも皆疲れた気配なく頑張って参加している姿が印象的だった。言語の壁はあったが、英語のできるグループは英語で、そうではないグループは通訳者を通じて情熱的に自分の考えを表現していた。私自身もいくつかのグループで通訳をしたが、参加者たちは本当に色々なことを考えていると感じた。また、基調講演を通して今の脱北者たちの現実や苦しさなどを聞く時にも、皆疲れているはずなのに熱心に聴いてメモを取り、平和な世界づくりのために実践すべきことを協議する時には、徹夜で熱心に話し合う様子を見て、本当に偉いと思った。ま

The 13th Korea-Japan YWCA Youth Conference

た、日本と韓国、そして脱北者たちが一緒に交流会をし、話し合う時間では、皆昔からの友だちのように仲良くなり、別れる時には寂しがっていた。講義やワークショップ、そして普段は行くことができない非武装地帯（DMZ）フィールドワークまで、すべてが忘れられない大切な思い出になった。

短いと言えば短いし長いと言えば長かった4日間、私が思ったことは今まで自分は周りに無関心だったということである。少しでも関心を持って周りを見ていたら見えたかもしれない人々に出会い、これまで自分のことばかりで精一杯だったことに恥ずかしくなった。今回の日韓ユース・カンファレンスを通して、韓国人だけではなく日本の人々と一緒に平和について考えたり悩んだりした経験は、私と私の周りの人々を振り返ることができた大事な時間であった。私たちが平和のためにどうやって生きればいいのか、何ができるのかについて小さなことから一緒に話し合ったことは、かけがえのない大切な時間だった。来年日本で開催される次のカンファレンスまで、ここで学んだことを忘れずに実践して、来年はもっと成長した姿で参加したいと思う。

韓国YWCA　大学生インターン　オ・セヨン
（翻訳：キム・ジウォン）

言葉の壁を超えて

今回の日韓ユースカンファレンスは、大学のボランティアセンターの紹介で知り、初めての参加でしたが、多くのことを学んだ本当に充実した日々でした。

ベン・トーレイ牧師の基調講演では民衆の生活の写真から北朝鮮の現状を知ることができ、メディア越しの存在でしかなかった脱北した青年の方と話した時には、彼らの北朝鮮に対する郷愁や、韓国における文化や価値観の違いへの戸惑いを知り、衝撃を受けました。しかし、何よりも私は、話をしてくれた女性の言葉を理解でき、自分の思いを彼女が話す言語で伝えられたことがうれしく、その時にこみ上げた思いは今でも鮮明に覚えています。また、日本のユースと韓国のユースが朝まで討論し、言葉の壁を痛感しながらもアクションプランを作り上げたことは、本当に大変でしたが大きな達成感がありました。初めてのことばかりで私にとっては貴重な経験の数々です。

また、個人的には通訳をしたことを通して、一方の考えを正確に理解し、一方に的確に伝える難しさを実感しました。そしてつたないものでしたが人の役に立てたことがうれしかったです。機会をくれた皆さんに本当に感謝しています！　来年もぜひ参加したいです。

フェリス女学院大学1年　久保翠織

子ども買春の根絶を目指して
日本・台湾のユースによるミーティング開催

2011年8月17日・18日、台湾で行われたECPAT（End Child Prostitution, Child Pornography and Trafficking of Children for Sexual Purposes）ユースラウンドテーブルに京都YWCAから堀部碧と原田みな美が参加しました。ラウンドテーブルは2日間という短い日程の中、日本・台湾の子どもの商業的性的搾取に関する現状・政府の取り組みの共有、ユースにおけるアクションや企業との連携など、多様な視点からの情報交換や議論がなされました。日本での性産業の大きさや、性産業に関する求人雑誌が無料で配布されている事実、また「出会い喫茶」といったお店の営業体系に、台湾のユースは終始顔をしかめながら日本の発表を聞いていました。ハイリスクエリアでのフィールドワークでも、日本語を記載しているお店を多数目にし、日本国内の問題だけでなく、日本が世界に及ぼす影響についても深く考えさせられる機会となりました。また、台湾のユースとの議論や交流により、子ども買春という問題に対する国境を越えたユースの連携を大きな学びとして日本に持ち帰ることができました。

京都YWCAでは今秋より、子ども買春を考えるユースグループ「Face」が発足しました。Faceは台湾での学びを基に、子ども買春・ユース・関西をキーワードとし活動をする予定です。被害にあう子どもたちを一人でも多く救うため、力を発揮していきたと考えています。

京都YWCA　原田みな美

種

あなたたちは、あなたたちの神、
主が命じられたことを忠実に行い、
右にも左にもそれてはならない。
…主が命じられた道を
ひたすら歩みなさい。
（申命記5章32・33節）

この聖句が私の忘れられない聖句になったのは、1953年1月に、前年末にインドで開かれたWSCF（世界学生キリスト教連盟）の会議に学生YWCAを代表して参加された林田雅子（現村上）さんが会議の報告会で引用された時です。信念をもって語られたその言葉は、現在も私の耳にはっきり響いています。

60年を超える信仰生活の中で、どれだけ私は左右にそれた歩みをしてきたことでしょうか。それない歩みをしていると思っていた時ですら、今考えると主の命じ給うた道から大きくそれていたこともあったと思います。

しかし、よく考えれば、私たち自身に、それているか、いないかの正しい判断はできないのです。ただひたすら、それない歩みをさせてくださいと祈るよりほかありません。その上で、これこそ主の命じ給う道と確信できた道を勇敢に歩まなければなりません。他の人の意見にも耳を傾け、力を合わせて共に歩むことも必要です。しかし、大切なことは、命じられた道を祈りのうちにそれずに歩むことなのです。

江尻美穂子
東京YWCA会員

エンパワーするNGO

YWCA

ご協力ありがとうございます

東日本大震災被災者支援募金

小野田照代　根谷崎和子　原　芙左恵　三股まさ子　三股奈津子　清水嶋　孝　中西トク子
稲葉和寿子　古河多佳子　長倉伊津江　勝見ふじ子　髙木タミ子　戸塚のぞみ　髙月三世子
髙橋りえ子　井澤須美子　竹田とし子　横山キミイ　佐々木洋子　谷山久美子　斎藤佐智子
田村三保子　辻村喜久子　山口ふじ子　坪田末沙子　池上三喜子　野口しのぶ　木岡小枝子
多喜百合子　村上美津子　小野小夜子　中山美津江　梶原恵理子　山高万寿子　武内冨貴代
乾　康子　今給黎とし子　松山恭子　調　幸子　興那原アイ子　宮澤麗子　森　千津　鈴木伶子
田口美穂　川西　薫　岩田和美　冨永明子　原川信子　吉田瑠都　白井陽子　阿部有三
宮本真里　足立圭子　宮本昭子　髙木弘子　松本幸子　川尻泰子　坂口和子　福井周平　須藤
和子　瀧本政子　熊江雅子　和田崇子　田村澄子　髙木俊生　戸塚栄子　都木恵子　大野綾子
茂木玲子　土居松枝　一色義子　黒木順子　藤原玲子　佐藤清子　村瀬きく　畔柳千枝　西野
和子　森田矩子　藤野尚子　高橋栄子　青木浩子　田原照子　三井貞子　常葉俊子　山根尚子
折戸和子　前川契子　平山芳子　水野潔子　早田紀子　松岡信子　横井容子　小村明子　小松
郁美　渡辺文子　浅原由美　北村和子　田沼祥子　中村秀雄　庄子泰子　原田早苗　今井美令
岸田晃子　川嶋博子　宮原栄子　高柳博一　上條正雄　上條し満　曽我勝儀　八木高子　首藤
和子　梶山好美　湯本麗子　杉原壽子　江﨑啓子　三宅泰子　岩崎妙子　中島潤子　須部道子
丸田昭江　依田良子　鎌原弘毅　鎌原恵子　神山妙子　安江恵津　田中倍子　島津良子　江副
史子　板橋俊子　野村春江　三宅文子　比企敦子　古西正子　幸福花江　真野あや　佐々木眞
千子　ランデス　ハル　郡　恭子　Rhoda　Hall　ナカダノリコ　エノモトサチコ　アイルラ
ンドYWCA　台湾YWCA　中国YWCA　光州YWCA　オーストラリアYWCA　スウェーデン
YWCA　KankakeeYWCA　函館YWCA　弘前YWCA　浦和YWCA　東京YWCA　湘南YWCA
平塚YWCA　浜松YWCA　静岡YWCA　京都YWCA　大阪YWCA　神戸YWCA　広島YWCA
福岡YWCA　熊本YWCA　名古屋YWCA　呉YWCA　東京YWCA国領センター春のつどい
東京YWCAフィットネスワオ　東京YWCAバザー実行委員会　東京YWCA専門学校同窓会
東京YWCA武蔵野センター　大阪YWCAシャロン千里　大阪YWCA大宮保育園　松山YWCA今
井万里遺稿集編集委員会　東洋英和女学院中高部宗教委員会　大阪女学院中学校・高等学校宗教
部大阪女学院中学校・高等学校東日本大震災被災者支援の会　女子聖学院中学校・高等学校
捜真女学校中学部・高等学部　松山東雲中学校・高等学校教職員生徒他有志　フェリス女学院
中学校・高等学校生徒会　とわの森三愛高等学校生徒・教職員一同　0422キリスト教合同プロ
グラム実行委員会　タイの子供達に絵本を贈るサワディープロジェクト　こひつじ保育園
南阿蘇絵本の国　長谷町さくら会　芳静会　MARKEY´S津久野店　串原食肉加工組合ゴーバル
心斎橋アートホール有志　匠ソリューションズ㈱　㈱ネローラハナコウボウ　福岡城東橋教会
子どもグループ有志　日本キリスト教団聖ケ丘教会社会委員会　日本キリスト教団中遠教会
ドイツ街頭募金　フランス街頭募金　世界YWCA総会2011ブースでの募金
〔助成金〕ドイツプロテスタント教会社会奉仕協会　中央共同募金会

（2011年5月1日～10月28日現在　敬称略）

3月15日からの募金総額3,238万7,693円

本の紹介

『沖縄　アリは象に挑む』

由井晶子／著　七つ森書館／発行
1,800円＋税

著者の由井晶子さんは那覇に生まれ、「沖縄タイムス東京支局の編集局長・論説委員を歴任されたフリージャーナリストです。「運動に少し距離を取りつつ寄り添いながら、全体を見回し論考するという立場で、定点観測のように沖縄を書き続けた」この文章は、1998年12月【米軍基地批判の大田昌秀知事、三選ならず】で始まり、2011年5月【あえて「挙国一致」の先になにが…を問う】までを収録した『労働情報』の所載記事です。周到な頭注資料や地図は、沖縄に対する私たちの浅薄な知識を十分に補ってくれます。地域YWCAでの読書会などで取り上げ、沖縄の心に自分たちの心を合わせた方もいらっしゃいましょう。

名護市辺野古沖の海上基地建設に伴うボーリング地質調査の掘削作業が本格化する中、資機材を積載した「象」のような作業船3隻に対して、反対する人々は「アリ」のように小さなカヌーで「挑ん」だのです。ジュゴンが棲息するという辺野古の海に面したテント村で、欠かさず今日も座り込みを続けながらアクリルたわしを編んでおられる平良悦美さんの、その祈りにも似たお姿に接した時のことを今思い出しています。いかなる状況にあっても、望みを失わない、しなやかな女性たちの群れのお一人です。

日本YWCAビジョン2015推進委員　杉村みどり

ご協力ありがとうございます

賛助費

青木恵子　青木浩子　井澤須美子
石川和子　板橋俊子　石井摩耶子
伊藤眞代　岩田陽子　石橋さなえ
牛島栄子　江崎啓子　石原千賀子
遠藤洋子　大川孝子　稲垣美栄子
加藤栄子　向後理恵　江尻美穂子
小貫ツマ　小村明子　大野美知子
斉藤純子　高橋敬子　奥平せい子
武内恭子　常葉俊子　木下由美子
得永道子　冨安邦子　栗原佐代子
中橋美鈴　永山峰子　小林喜美子
野呂幸子　比企敦子　小谷野淳子
一杉静子　松尾洋子　鈴木すず江
松山恭子　水野雅子　髙橋須賀子
三井貞子　三宅泰子　武井真美子
村瀬きく　八木高子　竹田とし子
安武留美　芳川雅美　辻村喜久子
吉田亜希　渡辺園子　中平多恵子
角田　健　小薗井恭仁子
中山美知子　仁木三智子
平木貴美子　森川恵美子
八重樫照代　渡辺美恵子

活動支援サポーター

青木恵子　川野　翠　武内冨貴代
小貫ツマ　小村明子　清水嶋　孝
鹿野幸枝　堤　稔子　山根尚子

多文化共生サポーター（国際協力募金）

女子聖学院中学校・高等学校

（パレスチナYWCA支援募金）

日本キリスト改革派東京恩寵教会

（オリーブの木キャンペーン募金）

河津　緑　小村明子　斉藤純子
林　直子

（ハイチ大地震被災者支援）

神戸YWCA

（フィリピン・サモア・アメリカンサモア・トンガ・インドネシアの台風・地震・津波被災者救援）

神戸YWCA

若い女性育成サポーター

小貫ツマ　小村明子　八木高子

（平和教育資金）

内海公子　横山由美子

（2011年10月20日現在　敬称略）

発行所 財団法人日本YWCA
〒102-0074 東京都千代田区九段南4-8-8
Tel. 03・3264・0661
office-japan@ywca.or.jp

【駿河台オフィス】
〒101-0062 千代田区神田駿河台1-8-11
東京YWCA会館302号室
Tel. 03・3292・6121/FAX 03・3292・6122

編集発行人 鈴木伶子
振替 00170-7-23723（毎月1日発行）
定価1部 150円
年間購読料 1,260円（送料込）